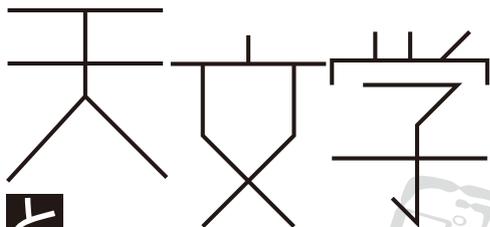


星空を眺めたり、宇宙のことを考えたりすることは、私たちの生き方にどのように役立つのでしょうか。



www.tenpla.net

プラネタリウム

vol.
217

☆ 高梨直紘 (東京大学) / 平松正顕 (国立天文台)

天文学はどのように私たちの生き方に役立つのか。天ブラの活動の根幹には、常にこの問いがあります。裏を返せば、この問いに答えることが私たちの究極の目標でもあります。天ブラのレゾナードルとも言えましょう。こういう言葉、使ってみたかった!

もっとも、日頃からそのことばかりを考えているのは、視野が狭くなりがちです。バランス感覚を欠いた原理主義が残念な結果に終わることは、歴史の証明するところ。そのような隘路に迷い込まないためにも、日々のふつうの暮らしに軸足を置いておくことは大事です。そして、折に触れてはこの問いに立ち戻ってみる。その行き来を繰り返すことが、天文学と社会の望ましい関係を考えていく上で必要なのだと思います。

2011年の東日本大震災は、まさにそういった「折」のひとつでした。厳しい状況に置かれた人々に対して、天文学はどんな貢献することができるのか。そのことを強く問われているように感じて、ずしりと重かったことを思い出します。この時は、被災地の避難所で観望会を実施するという貴重な経験を通じて、星空が人々の心のより所になりうることを確信することができました。この時の体験は、本コラムでも紹介しましたし、日本天文学会の会誌である「天文月報」2011年11月号にも『被災地における天文イベントの実施報告』としてまとめているので、良かったらご覧になってみて下さい(オンラインで無料で読めます)。

そして今、ふたたびこの問いに立ち戻るタイミングが来ているように感じます。ウクライナで起きていることは、私たちが決して平和な世界に生きている訳ではないことを明らかに示しています。報道で取り上げられないだけで、ウクライナに限らず地球上のさまざまな場所に、今この瞬間も理不尽な暴力や絶望的な状況に苦しんでいる人がいるはず。日本に暮らす私たちが当たり前だと思っている基本的な人権の尊重や、文化的な生活を送る権利が著しく毀損されている状況を目の当たりにした時に、天文学はいったいどんな貢献ができるのでしょうか。

もちろん、そんなこと、別に天文学が背負わなくとも…というご意見もあるでしょう。しかし、歴史を振り返れば常に天文学はそういう問いと共にあったんだと私は思います。むしろ、そういう切実な思いが天文学を発展させてきたと言ってもいいかもしれません。例えば、天文学の源流のひとつでもある占星術。洋の東西を問わず、文明の初期段階から近代に至るまで、個人レベルにおいても社会レベルにおいても重要な役割を担ってきました。そういった営みは、より良い方向に人生や社会を導くために、これから起こることを知りたいという人々の願いがベースにあったはず。不確実で、曖昧なこの世界の中で生きざるを得ない私たちが頼れるよすがとして、星空が使われていた。そのよう



久々にリアルに観望会ができました。こういう日常が大事。

に考えることもできるでしょう。

一神教的な神の存在と切り離され、自然哲学から自然科学へと発展を遂げた現代の天文学では、もはや個人の未来を言い当てることはできません。その代わりに、天文学は私たちは気が遠くなるほど広大な時空のごくごく一部を占めている存在に過ぎないことを教えてくれます。私たちが形作る物質は宇宙の星屑に起源を持ち、誰かだけが特別な材料で出来ている、などということはないことを教えてくれます。この世界は永遠などではなく、いつか終わりを迎えることを、科学の言葉で説明してくれます。私たちはそこから世界のありようを学び、いかに生きるかを考える手がかりを得ることができます。

この天文学が示してくれる厳然たる宇宙の姿は、個人の主義や思想に依りません。科学の営みを信用できるのであれば、地球は太陽系にあり、太陽系は銀河系にあり、銀河系は無数の銀河のひとつに過ぎないということは、認めざるを得ません。それぞれに異なる主義や思想を持つ人々が、同じこの惑星の上で共に生きていくために必要な対話のためのプラットフォームを、天文学は提供できる。そう考えるのが、現在の私にとってもっともしっくりくる答えです。

この答えが確かなものなのかを知るには、実証していく以外の道はありません。それは、結局のところ、私たちの日々の活動の積み重ねです。遙か彼方のゴールを見ながらも、足元もしっかり踏みしめながら進んで行きたいと思います。